

ダニエル 9 : 1 - 11 (パワポ)

Preface

ダニエルは、国の統治が変わるといふ、人生において一度あるかないかといふ程の大きな大変革を二度も経験しました。

一度は、祖国イスラエルが滅ぼされ、バビロンに捕虜として捕らえられてきた時、そして二度目は、70年間仕えてきたバビロン帝国が滅びて、メディア・ペルシア帝国にその統治が移った時です。

そして、この二度の大変革は、ダニエルにとっては、自らの存亡の危機とも言える崖っぷちのような状態でした。

今読んだ聖書箇所は、二度目の崖っぷちであるバビロン帝国が滅びてメディア・ペルシア帝国の支配下に生きることを強いられることになったところで、ダニエルが何をしたかについて記録しています。

前回、この同じ聖書箇所から、大きな大変革に翻弄されたダニエルが、キリスト者として初志貫徹する人生を生きることが出来た秘訣は、

困難な時こそ、神の言葉である聖書を読むことと、その言葉から与えられた悟りをもって祈ったことだということを見ました。

そして、今日は、その祈った内容と姿勢について見ていこうと思います。

Part One

ダニエルは、国の統治が変わることによって、自分や自分たちの民族の処遇がどうなってもおかしくないという不安の中で、神の言葉である聖書を、特にエレミヤ書を読みましたが、そこから、思ってもみなかった悟りを与えられます。

それは、70年という神が定めた時が満ちて、イスラエルに回復が起こるといふ救いの言葉でした。

70年間待ち続けた祖国の復興、民族の回復、そして故郷エルサレムへの帰還という驚くばかりの喜ばしい事実でした。

自分の思い通りに行くどころか、人が望むような条件一つそろっていない人生を生き、長年の苦勞がついに報われる時が来たといふ、心躍る悟りを与え

られたわけです。

民族の解放、祖国の復興という喜びは、歓喜であり、狂喜乱舞するほどの喜びです。

現代日本に生きる私たちには、ちょっと想像することは難しいほどの喜びかもしれません。

人は、人生を生かされていく中で、忘れることの出来ない歓喜の場面に幾度か遭遇しますが、一丁前に、こんな私の短い人生の中でも、何度かこう歓喜するような場面がありました。

そのうちの一つが高校3年生の時の大学受験でした。

小学校3年生から、将来の大学受験のために塾に通わされ、毎週日曜日には試験を受けるため池袋に通い、小学生の時にもうすでに、人生が嫌で嫌で、不安で不安で、仕方がありませんでした。

そして、高校3年生になって、小学3年生の頃から続いた約10年間の暗黒の受験戦争に、自分の能力と想像を遥かに超える、まぐれの結果を得て、何とか幕を閉じることが出来て、本当に嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。

受験の奴隷からの解放と言ったら、大げさかもしれませんが、嬉しさと感謝の思いが入り混じって、当時68歳の父親の口に思わずチューしてしまうほどに、嬉しかったことを覚えています。

ましてや、ダニエルです！

70年間待った捕囚、奴隷からの解放の知らせです。

正に、狂喜乱舞してもおかしくない、神が与えてくださった悟りですが、ダニエルの反応が変なんです。

ダニエル9：3 (パワポ)

何一つ喜ばしい単語が出てきません。

美味しいものをいっぱい並べたパーティーではなく、断食をし、
とっておきの衣装で着飾るのではなく、粗布をまとって、灰までかぶり、
歓喜の歌声を響かせるのではなく、哀願をもって、主を求めました。

断食、粗布、灰、哀願、何一つ喜ばしい単語が出てきません。
むしろ、痛み、悲しみ、悲哀の言葉ばかりが並んでいます。

特に、この断食、粗布、灰、哀願という言葉は、旧約聖書の中では、最大の悲しみと絶望を表現する時に用いられる言葉です。

今、ダニエルは、喜びどころか、これ以上ない悲しみを吐露しています。

そして、その祈りの内容も、悲しみでしかありません。

ダニエル9：5－11（パワポ）

歓喜と喜びの祈りではなく、一貫して、悲しみの祈りです。

9章全体に渡って一貫した、悲しみの祈りです。

変だと思いませんか？

一世一代の歓喜の場面で、ダニエルは一世一代の悲しみに陥っているんです。

ダニエルが、14歳の時、捕虜として捕まってきた時も、獅子の穴に投げ込まれた時も、こんなに悲しんではいませんでした。

むしろ、飄々と信仰を貫き、喜んでいるかのようにさえ見えました。

なのに、人生最大の喜びの場面で、ダニエルは、今まで見たこともないほどに、悲しみに打ちひしがれています。

実のところ、ここに、ダニエルのキリスト者としての真骨頂が見られるところ
です。

Part Two

じゃ、何で、ダニエルは、えも言われぬ喜びを知った後に、主なる神様の前に、断食をして、粗布をまとい、灰をかぶって、悲しみに入ってしまったのでしょうか？

それは、うわべだけの、外面だけの、目に見える捕囚生活からの解放よりも、イスラエル民族の主なる神様の前にあるまことの悔い改めと、その悔い改めから来る霊的覚醒の方が、遥かに、重要であることを知っていたからです。

うわべだけ、外見だけ、環境や状況や条件がどんなに変わっても、霊が、内側が変わらなければ、何にもならないということを知っていたからです。

霊が変えられ、内面が変えられ、核の部分が変えられない限り、また同じことを繰り返すことになるし、空しさが消えることもなければ、感謝もなく、満足も得られず、

神の恵み、神の慈しみ、神のあわれみゆえの救いに生かされていることに気付くことも出来ず、

再び、神の信頼を裏切り、神の前であっても、人の前であっても、被造物にあっても、不義をなし、悪を行って逆らい続けることを知っていたからです。

今、ダニエルにとって、目に見える外面だけの民族解放が、喜びにはなっていません。

主の前に立ち返り、根源的な罪の問題を解決していただいて、霊的覚醒をしていただかなければ、民族の解放が何になるんだというのです。

解放されて祖国に帰還をしたところで、神の言葉による愛をもって、生活を、暮らしを、政治を、行政を、国を成り立たせていかない限り、また滅びに至るということを、ダニエルは知っていたわけです。

ダニエル9：13（パワポ）

ダニエルには、問題の根本が見えていました。

それは、なおも悔い改めない人々の頑なさで罪深さです。

国が滅び、民族が滅びるといふ、こんなにも恐ろしい神の裁きを受けてもなお、不義から立ち返り、義なる神様の前にひざまずこうとしません。

だからダニエルは、「お願いですから、根本的な原因を見据えようとせず、悔い改めようとしないこの（イスラエル）民族を、私たちを、かわいそうに、不憫に思って、哀れんでください。」という祈りを献げるのです。

Part Three

頑ななイスラエル民族の姿は、私たちすべての人間の姿ではないでしょうか。

目の前にある問題の表面だけをひとまず片付け、直面している危機からとりあえず脱することばかりに躍起になって、

神の前に高慢で、横柄で、不遜であるという、すべての問題の根源とは向き合おうとしない。

大きな事故や災いが起こると、それまで見たこともない専門家が出て来て、ああでもないこうでもない、それは合っている間違っていると、一応の処置を施し、今度はそのようなことが起こらないと思っていても、また同じようなことが起こりますし、うわべだけを塗りたくって、ちょっと直すだけでは、根本的な解決にはならないわけです。

人の内面が、霊が、魂が、価値観が、世界観が変わらない限り、同じことを繰り返し、やがて滅びていくわけです。

聖書を見ますと、世界が滅びることが約束されています。

もちろん、その滅びは、大きな視点から見れば、神の御手の中にあることですが、結局のところ、人間が神の前に立ち返ることがないために、自らが招く自業自得の結果なのではないかと、昨今の状況を生きていると思わされて仕方ありません。

事実、聖書にも、そう書いてあります。

ミカ書7：2－6、13（パワポ）

イスラエルの滅びとその滅びを招いた、人間模様や社会の有り様について記していますが、これはイスラエルだけの話ではありません。

私たちすべての人間の、社会の、世界の有り様を良く表していますし、また、その行く末を良く言い表しています。

Part Four

以前、ギリシャ神話に登場する人に火を与えたという神々のひとりであるプロメテウスのお話を少ししましたが、この話は、現代の文明社会を肯定するために、都合の良いところだけ引っこ抜いて、肯定的に引用されることが多いんです。

でも、この話の本来の意図しているところは、肯定的な内容ではなく、むしろ、否定的で、悲観的で、人類の行く末を憂慮している内容になっているんです。

古代ギリシャの詩人アイスキュロスという方が、「人間の本質的な特徴は、すべての人が、自分に死ぬ日が来ることを知っていることだ。」と言いました。

つまり、人は、自分の限界を知っているということです。

しかし、ギリシャ神話の神々のうちの1人であるプロメテウスは、人が限界を感じながら生きているということは、似つかわしくないと、そして不憫に思えて、神々のトップであるゼウス神に反旗を翻し、人間たちの脆弱な状況を改善してあげようと、決して授けてはいけない3つのものを授けてあげました。

一つ目は、“人間が、自分の運命を前もって、知ることが出来ないようにした”ことです。

つまり、死ぬる日に関する知識、死ぬ運命にあるという自覚を失くし、死ぬということから来る限界を認識できないようにしてしまったわけです。

そのため、死をもってすべてが終わるという自らの弱さを意識することから自由になった人間は、何でも不敵に試みることが出来るようになりました。

二つ目は、“人の内に、かすかな希望を植えてあげた”ということです。

つまり、プロメテウスは、男も女ももっと良くなり、もっと領域を広げ、もっと能力を発揮し、もっと大きな野望を抱ける動機となるものを植えてあげたのです。

しかし、その動機は曖昧で、方向は定まらず、どんな実体とも関連しているものではありませんでした。

三つ目は、“神々のみが扱うことの出来る火を盗み、人間に授けた”ということです。

それゆえ、人は料理するようになり、武器を作り、窯で陶器を焼くことが出来るようになりました。

これをもって、技術文明の扉が開かれたわけです。

このプロメテウスのおかげで、私たち人間は、今のこの世界の在り様を、突き進むことが出来るようになったというわけです。

でもその内実は、死という限界に対する無関心、人間の実質的な状況にそぐわない目標の設定、私たちが生きる状況や環境を変えずにはいられない技術的手段の所有です。

これゆえに、人は、ものごとすべてにおいて、今の状態をそのまま維持することに耐えられなくなりました。

常に変わらなければならず、変えなければならず、もっと良くなると野望を抱き、したいことは何でもできる手段と方法を手にしたと錯覚し、何でもやるようになりました。

火はエネルギーを供給し、エネルギーは技術を生み出し、技術は機械を生み出し、機械は現代文明となっていきました。

そして、結果的に人は、自らが人間であることを悟ることが出来なくなりました。

むしろ、自分たち人間を神だと考え、神のように振る舞ってきました。

死に対する認識は、人間から薄れ、消えていきました。

取った行動の結果に対する感受性も失くしました。

人が、火を授けられず、神になったと錯覚するほどの技術的手段を持つことがなかったとしても、実のところ、そんなに悪いことはなかったかもしれません。

でも、人間は、神々の知恵と、神々の先見の明を持つことのない状態で、神々の技術のみを手にしてしまったわけです。

こんなことをしでかしてしまったプロメテウスは、ギリシャ神話の最高神ゼウスの激憤を受け、3万年にも及ぶ罰を受けることとなりました。

それは、決して解くことの出来ない鎖で岩に結び付けられ、昼は焼け付く太陽にさらされ、夜は凍りつく月の光に照らされるだけでなく、毎日、腹を鷲についばまれ肝臓を跡形もなく食べられてしまい、夜になって回復し朝になると、また、鷲に内臓を食べられるという、形容し難い痛みを繰り返さなければならない罰でした。

このプロメテウスの姿は、人間社会や現代の文明世界のあり様そのものを写しています。

プロメテウスによって、自立を促され、方向の定まらない野望を抱き、火を与えられ、技術を発展させることによって、人間は文明化された暮らしをすることが出来るようになったけれども、それと同時に、その生き方は、苦痛の原因にもなっているのです。

プロメテウスの内臓が癒えるように、技術の進歩がひと時の癒しをもたらしますが、それは同時に、再び、内臓を鷲についばまれる苦痛を招くことでもあるわけです。

人間を粗野な生き方から脱却するようにしてくれたものが、想像だに出来ない新しい苦痛を起こす原因にもなっているということです。

今、私たちは身をもってそれを体験しています。

化石燃料の利用が、行動範囲を広げ、物事の上を上げ、膨大なエネルギーを生み出し、世界中に眠らない街を作り出しましたが、

今度は、想像だにできなかった環境破壊と、気候変動と、病と、格差と、差別と、暴力と、色々な問題が生じて、今その真っ只中に生かされています。

技術的な進歩は、必然的に、苦痛を増加させる結果を招くことを経験していますが、止められません。

でも、私たちは悲劇は望みません。

解決策を求めます。

そして、プロメテウスの火に象徴される様々な技術の助けを借りて、ものすごい進歩を達成し、この時代の問題を解決することができるという幻想を抱き続けています。

神々から、もう少しだけ火をおすそ分けしてもらえれば、完全無欠な世界を作

り上げることが出来るという未練に、しがみついてきました。

私たちが生きている世界、時代は、至って、プロメテウスの的です。

信じられないほどの進歩と発展ゆえの、人間の本質に対する反抗的とも言える程の無関心、そして、すべての人間の中にある想像を絶するほどの苦痛があります。

でも、それを認めようとはしません。

プロメテウスの悲劇を、人類に対する警告と受け取ろうとはしません。

むしろ、逆に、プロメテウスの悲劇を、人が文明を手にすることが出来た勝利に、すげ変えました。

都合よく編集された神話は、神々から人間が上手いこと火を盗み取り、技術、エネルギー、道具を作ることが出来るようになったということばかりを強調して、それが、あたかもユートピアに通ずる門であるんだと世に知らしめています。

そして、プロメテウスの話に出てくる最も重要な部分、死の忘却（死を忘れ去ること）、曖昧な希望や野望、知恵も悟りもない方向性を失った状態で挑戦的に突き進むことのみを良しとする結果、毎日新たに起こる苦痛などの話は、一切、排除されてしまいました。

のど元過ぎれば何とか（熱さを忘れる）という風に、ひとまず、目の前の状況が改善することばかりに躍起になって、それを繰り返してきたしっぺ返しを、私たちは今、受けているような気がしてなりません。

神様がお造りになった被造物を管理し、守り、分かち合い、互いに支え合うように命じられたにもかかわらず、支配し、利権によっていくらかでも破壊し、独占し、それでもまだ、支配し、破壊し、独占し、今のような状態になった。

そして、この話が、イスラエルの民たちの70年間の捕囚期間にも、通づるのです。

イスラエルの民たちの70年間の捕囚期間には、目的がありました。

それは、70年間土地を休ませるということです。

Part Five

歴代誌第二36：20－21（パワボ）

人が起こす争いの根本的な要因は、土地の奪い合いです。

つまり、領域やテリトリーの確保のための戦いです。

そんな戦いをよそに、イスラエルの民たちは、人類史上唯一、神様からとても

大事なモットーを与えられました。

それは、レビ記 25 : 23 にある

レビ記 25 : 23 土地はわたしのものである。(パワポ)

という言葉です。

この言葉の通り、人の生活の基盤である土地は、人間のものではなく、神のものです。

そして、イスラエルの民たちには、神から無償で与えられる約束の地にて、土地をもって争い、土地をもって差別や格差や暴力が生じ、また弱者や動物や植物や家畜や作物が虐げられることがないように、

“土地は主のものだ” という御言葉に従って、社会を、暮らしを、自然の秩序を、成り立たせていくことが求められました。

具体的に言いますと、

無理な生産を促すために、必要以上に土地を酷使することがないように土地を休ませ、それと同時に他の動植物や被造物にも気を配ること。

土地を休ませるということは、収穫が無くなることだけれども、欲張らず、信仰によって、日ごとの糧を与えてくださる主に信頼して歩むこと。

また、(個々の) 土地から与えられる収益ゆえに、どうしても生じてしまう借金や借りを帳消しにする、人間にとっての安息を施行することですが、

イスラエルの民たちが約束の地に入った時から、イスラエル王国が滅びるまで、約 870 年間、主なる神様が定めた安息が、まともに守られることはなく、その結果国が滅び、強制的な安息に 70 年間入れられたというのが、70 年間の捕囚の目的です。

欲張りすぎた結果、招いた滅びであり、捕囚でした。

Conclusion

今コロナ禍で、様々な人間活動が、否が応でも強制的に抑制されていますが、ヒマラヤの山々が澄んで見え、絶滅危惧種の繁殖が回復したという、地球全体の土地に安息が成されているかのような報告がたくさんあります。

これを私たちは、どう捉えて行けばいいのでしょうか？

ダニエルは知っていました。

神の言葉に従わず、神に逆らい、神に対して罪を犯した結果招いた滅びだということ、また神の前に罪を自覚し、告白し、赦しを乞い、悔い改めずに、うわべだけ回復したところで、何にもならないということを示され、分かっていました。

だから、断食をし、粗布をまとい、灰をかぶり、祈りと哀願をもって、主を求めたのです。

国の復興、民族の回復、祖国への帰還をしたところで、プロメテウスのような外面だけを取り繕うような世界観を持ち続けるならば、また同じことの繰り返しどころか、取り返しのつかないことになることを知っていたわけです。

偽りの神々のひとりであるプロメテウスは、天の王なるまことの唯一の神に、祈ることはしません。

そして当然、プロメテウスのような世界観に生きる者たちも、まことの主なる神様に祈ることはしません。

なぜならば、やらなければならないことが、あまりにも多く、それをやる時間さえもあまりにも足りないからです。

祈ってなんかいられません。祈ったところで、何になるんだと思っています。祈る時間があるくらいなら、やらなければならないことを少しでも、やらなければなりません。

少しでも早く、プロメテウスの内臓が癒される夜を早めなければならないからです。

でも、ダニエルは分かっていました。

灰をかぶらなければならない時を、分かっていました。

ワクチンの開発、経済の復興、格差の解消、暴力や差別の排除、自然環境の回復、家族・家庭の回復、試験の点数、昇進、全部大事なことです。

でも、もし、プロメテウスの内臓が癒される夜の時間を早める考え方でのみ、取り組むならば、やがてまた、内臓をついばまれる時がきます。

今、私たちキリスト者に求められているのは、断食し、粗布をまとい、灰をかぶって、祈りと哀願をもって、主を求めることです。

主イエス・キリストを求めることです。

そこにこそ、まことの回復があり、復興があり、帰還があり、滅びへと誘うプロメテウスの思考から、脱却する唯一の方法です。

イエス様を求める祈りこそ、すべてです。

だから共に、灰をかぶる恵みに与っていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ダニエル 9：3